

# ドイツの学校におけるいじめ防止プログラム

## Mobbing prevention program in German schools

松本 浩之\*・柳生 和男\*\*

HiroYuki MATSUMOTO, Kazuo YAGYU

要旨：平成 25 年 9 月に松本と柳生は、ドイツの首都ベルリン特別市の北東部にあるリヒテンベルク行政区の基礎学校（Grundschule）と上級学校（Oberschule）を訪問し、日本の学校のいじめにあたるモビング<sup>1)</sup>を予防する教育プログラムの実践を見る機会を得た。モビング予防のための教育プログラムとその実践状況を報告し、日本の学校におけるいじめのとりえ方とその対策との比較を行い、リヒテンベルク市におけるプログラムの日本の学校への導入の可能性について考察した。

### 緒言

松本、松田、柳生、新井は、本誌第 35 集において平成 20 年 10 月から平成 24 年 10 月まで計 5 回にわたるドイツ及びスイスの学校や教育関係機関への訪問調査からの報告をまとめた。松本と柳生は前回の報告で残された課題のうち、ドイツの学校におけるモビング予防プログラムの実施状況を調査するため平成 25 年 9 月に再びドイツを訪ね、ベルリン特別市の中にあるリヒテンベルク行政区の基礎学校（Grundschule）<sup>2)</sup>と上級学校（Oberschule）を訪問し、プログラムの実施状況を目の当たりにすることができた。本論では、視察校での観察やインタビューをまとめ、ベルリンでのモビング予防対策を概観し、そのプログラムの日本の学校への適用の可能性について検討する。

### 1. Randow-Grund-schule（以下ランドウ校）におけるバディプロジェクト

ランドウ校は、ベルリン郊外の閑静な集合住宅の中にある、ごくありふれた基礎学校（1 学年～6 学年）<sup>3)</sup>に見えた。ここではバディ＝プログラムの推進により、子どもたちに社会性を習得させ、子どもたちの暴力行為やモビング（いじめ）を予防することに効果を上げているという。視察では、校長及び主担当職員（バディートレーナー）、バディ代表の子どもにプロジェクトの経過を聞き、バディプロジェクトが日常の学校生活の中でどのように働いているかを観察するこ

---

\* まつもと ひろゆき 文教大学情報学部

\*\* やぎゅう かずお 文教大学情報学部

とができた。聞き取りと観察から得られたことを以下にまとめる。

### （１）プログラムの開始

そもそもバディプロジェクト立ち上げは、教師コンタクトセンター・リヒテンベルク（Kon-taktlehrerzentrum Lichtenberg）の発案に始まる。センター発行の報告書によると<sup>4)</sup> このプロジェクトは、当センター責任者で学校開発アドバイザーであるベース氏（Rainer B  th）と心理学のドクターであるシュタイニンガー氏（Wolfgang Steininger）によって考案されたものである。《バディ》はプログラムであり、目的は積極的な暴力の防止であり、バディたちは社会的な行動を行う上での判断能力を育て、全学年をひっくるめた援助を児童青少年に提供すると記されている。

ランドウ校では、二人の教員が教師コンタクトセンタートレーナー養成の研修に参加し「スーパーバイザー」<sup>5)</sup> からノウハウを伝授され、バディトレーナーとなっている。（このトレーナーには教員、保護者、幼稚園資格をもつ教育士などになれることができる。）この二人の教員が核となって2006年にバディプログラムがスタートしている。

### （２）始まった頃のこと

バディとは上学年による下学年へのお世話の活動であり、世話する側とされる側の良好な人間関係をつくることをねらいとしている。バディ活動は朗読バディ（読み聞かせ活動）から始まった。4年生以上の子どもを募集し、自主的に応募してきた25人の子どもをバディトレーナーがバディにふさわしい活動ができるようにトレーニングした。朗読バディはすぐに学習バディへと発展し、学習バディは、一対一からグループへと広がりを見せた。

### （３）学習バディ

ねらいは、学習バディ（教える子）と教えてもらう子の良好な人間関係の構築にある。困った時に「困った」「助けて」と言えるような間柄になることを重視している。上級生（4年生以上）が3年生以下の子どもに授業中に教えに行くシステムで、上級生は自分の授業がリラックス科目（集中を要する科目ではない科目）の時にバディに入る。自身の成績がそれほどよくない上級生でも、下級生が相手なので教えることができる。何曜日の何時間目に入るかは、バディが週計画表に記入することで決まっていく。自分の入れる時間に自主的に活動するという態度を重視している。



学習バディの実際

### （４）「ブレイクバディ」の成立

2009年に「ストップルール」を導入した。これは、子ども同士が喧嘩やいさかいの場面で攻撃行動がエスカレートした際などに、自分自身で「ストップ、ここが限界だ」ということが言えるようにするルールである。他の人をぶたない、悪口を言わない、気分をそこねないなどが具体的な内容で

ある。ストップルールの定着のために新たなバディが生まれている<sup>6)</sup>。ストップバディや争いバディなどがそれにあたる。その機能は、子ども同士の争いごとのエスカレートを防止し、解決方法を一緒に考えることである。これは仲裁や調停という機能を果たすことが期待されるので専門的なトレーニングを受ける必要があった。バディの選考委員会というのは校長、教頭、それから担任の先生とそれからその生徒の中、生徒代表で構成されていた。この委員会で志願者から争いバディになる子どもが選ばれた。



ストップルール

子どもが選ばれた。ブレイクバディになるためにはバディトレーナーより専門のトレーニングを受ける。トレーニングが必要なのは、仲裁役、調停役をになうためには訓練を要するためである。

これ以前には別に「規律バディ」というのがあった。これは授業時間と休憩時間のけじめをつけるため、こども達が自主的に管理できるようにつくられたが、このメンバーは皆の尊敬を集めることができなかった。特権意識をもつだけで、手本となるような行動が示せなかったことが原因であった。そこで「規律バディ」のかわりに「ブレイクバディ」が誕生した。5年生以上がこのブレイクバディになることができる。トレーニングの期間が終わると、全校生徒の前で修了者が紹介される。ブレイクバディは経験が必要な難しい仕事なので5年生がバディになりたての時は、必ず6年生が付いている。「ブレイクバディ」は自主的に志願しただけに大変モチベーションの高いこども達である。非常に信頼できる子達で、子ども達の尊敬も受けていて、お手本になる子ども達である。

実際にブレイクバディをやっている子どもにインタビューしたところ、

○トレーニングをきちんと受けたので自信を持ってやっている。

○けんかをなくすことに役に立つことができそれをほこりに思う。敬意をもらっている。

○何回もくり返し被害を訴えてくる子がいる。対応が難しい。

などの感想が聞かれた。

#### (5) バディの活動の広がり

ランドウ校では現在約100名のバディが活躍している。全校の子どもの数が321名なので4年生以上だけがバディをやっているとすると、学年の半数以上の子どもがバディ活動に参加していることになる。バディ活動を継続していると、学年の終わりに証明書の授与などの栄誉が与えられ名誉を得ることができる。また、報償として年1回の食事会や遠足などの機会が特権的に与えられる。ベストバディを選ぶ投票があり、15名ほどのバディが選ばれ国会議事堂へ招待された。

#### (6) 「社会生活の習得<sup>7)</sup>」という科目

これらの多様なバディの活動を支えているのが各学年に週1時間配当されている「社会生活の習得」という科目の授業である。社会生活のルールを習得する時間である。ルールがあれば社会生活がスムーズになる。教師は手作りでプログラムをつくる。1、2年生のうちからその科目の中で共同作業を経験していく。3年生のテーマはコラボレーションである。4年生から学級委員

会が始まる。学級委員会では、まずクラスの問題等を話し合う。専用のノートがあり、そのノートにクラスのメンバーは思うこと、問題とか要望とかを書き込むことができる。学級委員会の中でそれを読み上げる。会の始めには、人からしてもらって気持ちよかったことなど肯定的な対人関係の経験が発表され、ムードを和やかにする。授業改善のための提案なども行われる。専門グループの担当するヨガなどの授業もある。健康に関するプログラムもある。

## 2. ランドウ校の取り組みの考察：バディプロジェクトによる社会生活の習得

いじめ防止プログラムの実践の視察ということで訪問したランドウ校で見たものは、子どもたちが「自主的なお世話活動」を中心にして学年を超えて交流する姿だった。社会生活の習得のためになぜ縦の関係での交流を重視するのか。基礎学校の年齢の子どもたちの場合には「お世話したい」「助けてほしい」と心から願うためには学年の差が必要だったからなのではないかと考える。

いじめ防止の視点に立ってこの縦の交流活動を見てみると次の様な事が言えるだろう。縦の関係では、決定的な能力差がある。つまり力関係では、当然上の学年の子どもたちが優位である。森田がいうように「力関係のアンバランス」は「いじめの本質を規定する基本的かつ不可欠な要素」の一部をなす。これが「乱用」<sup>8)</sup> されれば縦の交流活動はいじめを生み出す温床にもなりうる。バディプロジェクトでは、上の学年の子どもたちがその力の優位を乱用するのではなく、逆に下の学年の子どもたちを「お世話して」「面倒をみる」べき対象なのだということを教え込む。そして下の学年の子ども達には、上の学年のお兄さんお姉さんは威張っていて怖い子ではなくて、困った時に「助けて」と言える存在、頼りになり信頼できる存在であることを実感させる。これは力関係のアンバランスを乱用してはならない、逆に強いからこそ助けるべきで、お世話し助けることは皆に称賛されるべき行為であるという価値基準を明らかにすることである。プロジェクトの具体的なプログラムの中にバディ達の優れた行為を全校の子ども達や保護者の前で称賛したり、表彰したりする儀式を盛り込み、それをいかに重んじているかをランドウ校の校長が強調していた点に端的に表れている。

社会生活の習得の価値的な基盤は

- ・力のある者は、弱い者の世話をし助けその行為が周りから称賛されることによって社会への帰属意識を得る。
- ・力の弱い者は、「助けて」と声をあげ実際に助けてもらい、信頼することによって、社会への帰属意識を得る。

この基盤の上に立ってバディプロジェクトが推進されていると考えられる。

## 3. Fritz-Reuter-Oberschule（以下ロイター校）における取り組み

ベルリンの郊外、リヒテンベルクの街中に位置する中等教育学校（Sekundar Schule）で、720名の生徒が在籍している。ギムナジウムへの進路選択も可能な学校である。この学校に在籍しながらアビトゥーア（大学入学資格試験）をうけることもできる。この学校に入学することで進路が狭められることがないという意味で、すべての子どもたちに開かれた学校ということができる。すべての子どもたちを受け入れる姿勢で門戸を開いている。入学時での選別は行わない。

どんな生徒も退学にはしない。そのために社会生活の習得の必要性がある。これは当然のこととして従来からやってきたことだが、Dr. Steininger からアンチモビングの取り組みを聞いて、改めて意識して教育活動を行うこととなった。65名の教師、ソーシャルワーカー、社会心理学士、学校心理学士などが在籍している。生徒たちは多様で、国籍や人種、宗教などバラエティーに富んでいる。生徒たちの家庭は経済的にあまり豊かとはいえない。しかし大きな問題は起きてはいない。

### (1) ソーシャルワーカーを核とした社会生活習得の学習と学校生活上の問題解決

ロイター校には3人のケースワーカーが常勤職員として配置されている。ソーシャルワーカーは生徒たちに社会生活のあり方を身につけさせ学校生活上の問題解決を促進するために専門的なトレーニングを受けている。このソーシャルワーカーが中心となって生徒たちに社会生活について学ばせ、円滑な学校生活が送れるようにしている。

ソーシャルワーカーの仕事は以下の通りである。

- 生徒同士の争いやもめごとやモビングの仲裁、調停、解決をする。
- 社会生活の習得のための授業を行う。(各クラス週に1時間)

授業は学年ごとにテーマを設定している。

- 7年生 モビング
- 8年生 性的いやがらせ
- 9年生 依存症(アルコール・麻薬・タバコ・ゲーム・ネット他)
- 10年生 仕事へのアドバイス

- 生徒たちを気軽に話せる関係をつくり困った時に授業中でも話に来られるようにする。被害にあった感情に共感し被害の拡大の防止と解決を図る。
- 授業参観をして生徒たちの学校生活に問題がないか見守る。
- 保護者と学校をつなぐ役割を担い、生徒が登校できるように家庭訪問も行う。社会的に弱い人々の家庭を学校サイドから支援する。

### (2) ソーシャルワーカーによる授業

#### ア) モビングがテーマの授業

ソーシャルワーカーによる入学したばかりの7年生への授業の概要を以下に記す。

- モビングにはどんなものがあるのか自分の体験を含めて生徒が発表する。
- 生徒と話し合いながらソーシャルワーカーが種類分けをし、板書する。(カードを貼る)

#### 身体によるもの

うつ・たたく・殴る・脅す

#### 言葉によるもの

侮辱する・悪口をいう・ののしる・  
悪い噂を広める

#### 言葉によらないもの

仲間はずれ

写真やビデオをネットで盗用する





○モビングの起きる経過について以下の様な内容が生徒と話し合いながら明らかになっていった。

喧嘩をすると争いになるが大抵は仲直りする。仲直りできればモビングにはならない。モビングでは一人が長期的にターゲットにされ、肉体的精神的に傷つけられる。ではこのようなモビングはどのようにして起きるのかどこから起きるのか考えてみよう。モビングは学級で起きる。学級にいるみんなはそれぞれ違う。容貌や性格、一人一人のアイデンティティはまちまちである。そんな中で誰かと誰かが喧嘩する。大抵は何かの誤解から喧嘩になる。それが仲直りできずにエスカレートすることがある。双方のうちどちらかが優位に立つ。勝負がつき勝者と敗者が生まれる。クラスの他の者はそれを見ていて強い方につこうとする。敗者はもう喧嘩はしたくないと降る。しかし勝者は敗者に対してさらに自分の力を誇示しようと攻撃の手をゆるめない。自分の権力、影響力を強めようとする。敗者の側にももともと友達はいたろう。しかし敗者になることで敗者に味方する者がいなくなる。敗者に味方したら勝者に今度は自分がいじめられるのではないかと不安に思うようになり、味方をやめて傍観者になってしまう。勝者のもともととの友達はいじめを助長して勝者にさらにとりいろうとする。勝者はクラスの仲間に見られている、誰も否定するものはいないという視線を感じながらいじめをエスカレートさせ、ますます自分の力を誇示しようとする。敗者は益々孤立していく。クラスの仲間は見ているだけで、誰も自分の味方になってくれないと感じる。

モビングとサイバーモビングには似ているところと異なるところがある。人を言葉や画像などで傷つけたり、侮辱したりするのは共通している。しかしサイバーモビングはより性質が悪い。サイバーモビングは出所がわからなくて拡大していくので止めようがない。データが盗まれて悪用される。学校を転校しなければいられないほどに追いつめられる。この教室だけの問題だったら、指導者の目が届く。一人一人話せるので解決ができるが、メディアを使うとそれはマスメディアなので、指導者が手を差し伸べられる範囲を超えてしまう。教室のいじめは帰宅することで逃れられるが、サイバーモビングは家のPCや携帯電話までやってくる。一回だけ使った写真が何千何万の知らない人たちの目に触れるようになってしまい、その連鎖を食い止めることが難しい。被害者は自衛できない。サイトを読んだ見ず知らずの人が自分に攻撃を仕掛けてくる。それがサイバーモビングである。

○モビングに対する対処法について考える。これは対象が新入生ということもあり、ソーシャルワーカーによる啓発という形で以下のような内容が話された。

ではどうすれば逃れることができるでしょうか。この学校では、とにかくそれを全部公開します。大抵いじめを受けると、生徒はだれにも打ち明けません。訴えません。大切なのは両親、保護者、先生、校長先生、信頼している先生あるいはだれか信頼できる大人、そういう人に助けを求めることです。シグナルを出せば大人が助けてくれます。サイバーモビングにあつたらとにかく証拠をつかみましょう。たとえばサイトの管理人に出所を調べてもらったりしましょう。それから日記を書きましょう。何をされたか日記に記録をつけましょう。サイバーモビングの時は、書き込みに対してレスしないことが大切です。レスさせることがサイバーモビングをする側の目的だからです。無視することが大切です。ネットを切ること、見ないことです。それで警察に訴えましょう。なぜならば写真を載せられたり、侮辱されたら警察に訴えることができるのです。すぐに訴えなさい。まだ新入生だからあまりそういうことはないかもしれないけど。

訴えたら警察の記録に残ります。つまり加害者は前科者になります。例えば14歳で訴えられたら罰金を払わされます。場合によっては刑務所に入ることになります。加害を重ねれば罪は重くなります。警察の記録は確かに残り、犯罪を証明するのです。だからされるがままになることはない。泣き寝入りをしてはいけません。何もしなければよくならないということ覚えてください。みんなにはモビングに抵抗する権利がある。それを先生、友達、そして最後の手段として警察に言いなさい

#### ○生徒の反応

被害にあったら訴えなさいというソーシャルワーカーの話に対して生徒たちは自分の体験として、太っているからと悪口をしつこく言われた、たたいてくる子がいて、何度やめてといってもやめてくれなかった、などの被害経験が聞かれた。そして基礎学校では先生に被害のことを何度訴えても対処してくれなかった、先生がその子を叱ってもその子はやめてくれなかった、などの経験が語られ、今までの不満と新しい学校での期待が語られた。

#### ○授業直後のソーシャルワーカーへのインタビュー

この学校での大きな仕事の一つが、いじめをやらねばなしにするなということを、生徒たちに訴えること強調することだと考えている。被害を隠していると加害者の攻撃はどんどんエスカレートしていくということを教えている。モビングされたくないという意味を表明しなければモビングは収まらない。小さな喧嘩やいさかいのうちに私のところに来てもらって大ごとにならないうちに解決することができた事例もたくさんある。モビングの訴えがあった場合には、被害者と加害者を呼んでソーシャルワーカーと一緒に話し合いをする。改善しない時は保護者を呼んで話し合いをする。それでも改善しなければもう制裁のために警察に訴える。長期にわたって被害に遭い続けなくようにすることが大切でそのための最善の方法は公開すること、公にすることだと考える。

### イ)「流水渡りゲーム」を通した授業

ゲームを通して社会生活の在り方を体験的に習得する授業である。これも新入生を対象としたもので、この同じゲームを毎週繰り返すことによって仲間関係をよりよいものにしていく。第1回目なので授業の目的がまず生徒に明らかにされた。

#### ○今日の授業の目的の説明

モビングは避けられないかもしれない。あなたもモビングに会うかもしれない。その時に一人きりにならないことがとても大事です。協力者、助けてくれる人がいれば強くなれます。約束が守られて、仲間を信頼できると感じるのが大事です。信頼して訴えることによってモビングが止まるのです。そのために初めての今日は実態調査をしましょう。助け合い度（社会性の資質）を調べてみることにしましょう。

#### ○ゲームの内容

チーム全員が、海に浮かんだ氷に跳び移りながら向こう岸までたどり着くというゲームで、チーム対抗で早さを競う。氷は小さくて二人しか上に乗ることができない。しかもお互いに支えあわないと海に落ちてしまう。氷の数は少ないので、先へ先へと動かしながら跳び移らなければならない。一人だけ向こう岸にたどりついて後の方が続かないような状況をつくってしまってはアウトである。アイデアを出す者、方針をまとめる者、指示する者などがいて、仲

間が共通理解して初めて早くたどりつけるように考えられたゲームである。

#### ○ソーシャルワーカーへのインタビュー

初めての流水渡りゲームなので、新しいクラス、新しい仲間で一人一人の生徒がどのような社会性の資質を持っているのかを調査している。仲間になかなか入れない生徒は誰なのか、指図はするけれど言葉がきつくなるのは誰なのか、よいアイデアを持っても広めることができないのは誰のかなど。生徒には次回も同じゲームをやることを予告してあるので、次回までに休憩の時などにチームの仲間と「あの時うまくいかなかったのは〇〇が原因だったのではないか」とか「板をこうしたら速くなるかもしれない」とかいろいろな話し合いが行われる。これが生徒の社会生活の習得を促進すると考えている。また、見ていただいたように一枚の氷の上ではお互いに支えあわないとはみ出してしまふ。これが他者とのよりよい身体的接触のあり方を学ぶ機会になると考えている。



○補足：初回のゲームでソーシャルワーカーは、生徒たちのチームワークのパフォーマンスを観察して実態把握するとともに、ゲームのルールを明確に示し、スタンドプレーではチームの成績は上がらず、アイデアの提案や協議、共有、協力などのチームプレイが必要であることが実感できるように適宜指導していた。

#### ウ) 学級委員会（クラス会議）10年生のクラスの観察

○各クラスで定期的に開かれている。

○特別な役割を担う生徒が3名いる。クラスのメンバーから選出されている。

司会：会議の議長役

司会のアシスタント：司会を補佐する、いわゆる副議長役

監査：話し合いのルール（挙手して指名されてから発言する、静かに話を聞くなど基本的なこと）が守られているか監査する役

○テーマはいつも3つ設定されている。

このクラスでは会議のはじめにメモ用紙を渡してそれぞれのテーマについて自分の提案を書かせて回収し、読み上げながら進行していった。（議題の提案にあたる）

##### ①ほめたい事、賞賛に値することの発表

〇〇さんが勤勉でとてもよい。

みんな、のけものをつくらない。みんなを褒める。

7年生の時にははじめがあったけど今はない。だんだんよくなってきた

クラスがまとまっているのは、本当だと思う。お互いに理解できるのはよいと思う。

イブラヒムも仲間になった。最初は排除することがあったけど今はない。

グループはあるけど全体でまとまることができる。

##### ②批判したいこと、改善すべきことの発表と解決策の話し合い

〇〇が批判されている。あんまり無駄口きくな。僕だけなぜ批判されるの？みんなやっている。



物理の授業がよくなってほしい。数学の授業がよかった。先生のいうことがわからなくなった。物理の授業が理解できていない人は誰？先生と話し合って解決する？数学もわからない人はいるよね？先生に分かってもらった方がよいのではないかな？静かに落ち着いて話に行けばいい。誰かが代表で話し合いをした方がいい。文句をつけるのではなくて。

クラスのある人が宗教（カルマ）を持ち込んでくるのが嫌だ。

③希望、こんなことがしたいということの発表と具体化のための話し合い

起立して挨拶するのがいい。

制服がいい。制服がほしい。制服はクール。制服を着たらきちんとみえる。立派に見える。

エキサイティングな修学旅行にしたい。9月のバルト海はいやだ。でも決まっている変更できない。

#### 4. ロイター校の取り組みの考察：クラスの中での社会生活の習得

ランドウ校での視察の中心であったバディプロジェクトはロイター校では説明の項目に挙がらなかった。バディ活動はないのかと質問したところバディは衛生班という名前でカフェテリアでのボランティア活動として生きているとの回答だった。ランドウ校のような休憩時間のトラブルを仲裁するブレイクバディは基礎学校だけだそうで上級学校には存在しないとのことだった。バディの活動は、上級学校では正直影が薄いという印象だった。その理由の明確な説明はなかったので推測に留まるが、中等教育段階の生徒たち（7年生から10年生）になると、年齢差による圧倒的な能力差というものがあまり見られなくなるからではないだろうか。

ロイター校の実践で注目すべき点は以下の通りである。

##### （1）初学年における徹底したモビング防止プログラムの実践

前述の通り、ソーシャルワーカーによる授業は学年ごとにテーマを設定されていて、7年生では1年間を通してモビングについて学習する。何故新入生がモビング予防の学習をするのか、その理由は、アンチモビングコファァーの中にある「いじめのない学校」の記述で明らかである。以下抜粋して訳す<sup>9)</sup>。

種々のグループは一定の決まりをもって形成されます。それはクラスについても言えます。この決まりが分かれば、教師は自分のクラスにモビングが起き易いか否かの判断が付き易いと思います。（中略）

##### 1. 方向を定める段階（forming グループの形成）

新しく始まったクラスに入って、生徒同士は互いに探り合い、又、教師との関係も探り合う。

##### 2. 争いの段階（storming）

生徒達はグループ内のポジションの獲得で、あるいはポジション相当の承認を求めて争う。

（中略）

モビングの危険は第2段階の争いの段階で最も大きくなります。「争いは価値、社会地位、権力、方法をめぐっての争いです。」この状態になると生徒達はそれだけでなくグループ内でのランクや賞賛を求めて争います。社会地位が闘争の焦点であるが故に、これらの争いは強まる可能性

があります。

#### 5 学年と 7 学年の “Storming”

グルントシュレ終了後に上の学校に入学する生徒（第 5 学年）は新しい編成のグループを作ります。そして上記に書かれた過程を追って新たなグループが始まります。このことは第 7 学年にも言えます。こういう状況に置かれた生徒で社会的な能力が充分持ち合わせていなく、コミュニケーションの機会が減多に無い者は、争いに対してポジティブに対処するのが難しくなります。これはいとも容易にモビングの温床の原因になります。

#### （2）客観的な視点の付与

モビングを扱った授業の中で印象的だったのは、新入生に対してモビングについてその種類やメカニズムを子ども達の経験に基づきながら詳細に説明するということだった。つまりこれからクラスで起こるかもしれないモビングについて、自分が巻き込まれる前に客観的な視点から眺める視点を持たせる必要があるということだろう。

モビングが成立するメカニズムの説明の中で、加害者と被害者の周りにいた友達が、観衆や傍観者の役に回る過程が明らかにされていた。これをクラス皆で確認することは「モビングはクラス皆の問題なのだ」という意識を育てるために大変重要だと考える。

#### （3）対処法の明示

さらに授業の中で強調されていたのは、被害に遭った時の速やかな対処法である。被害が拡大しないうちに被害を申し出る、訴えて出ることの大切さであった。訴える先は誰でも信頼できる大人、そして最終的には警察へ訴えなさいと強調していた。これは基礎学校で「自分より年齢の上の大人は自分たちを守ってくれる存在なのだ。正当な訴えは聞き入れられるのだ。」という信頼感が醸成されていて初めて実効力のある働きかけになることであろう。

#### （4）社会的な制裁が確かにあることの強調

加害者になる可能性のある生徒への呼びかけとして、モビングを続けた時には必ず社会的な制裁を受けるのだということを明確にしていた。「不正義は罰せられる」この感覚は社会的秩序を健全に保つための基本となる。

#### （5）グループワークを通して体験的にポジティブな仲間関係の形成の仕方について学ぶ

「いじめのない学校」の中に「モビングに対して教師が出来ること」という項目で、「クラスの仲間作りをサポート」「生徒同士が良い形で成長出来るようなルール作り」「生徒が自らの社会的能力を伸ばし、相互の好ましいコミュニケーションを築くよう励まし」などが挙げられている<sup>10)</sup>。これらを具体化したのがゲーム的なグループワークに長期的に楽しみながら取り組ませることなのだろう。さらに注目したいのが実際のゲームの中に生徒同士の身体的な接触の場を意図的に設定していることである。生徒同士の身体的な接触は暴力に結びつきやすいが、ここではそのようないわば負のベクトルを正のベクトルへと変換しようとする意図が隠されていると考えられる。「いじめのない学校」に示されているアンチモビング週間のプログラムにも好ましい身体的な接

触のあり方のためのエクササイズがいくつも提案されている。例えば「コンタクトトレーニング」というエクササイズでは、生徒が円陣になって隣同士と手を近づけ軽く触れて合図を伝えていく。この時、生徒たちが、たたく、つねるなどの好ましくない行為をとることも予想してその対処法等についても詳しくアドバイスしている。

#### (6) 学級委員会（クラス会議）で学級を評価する

イ) で自分たちのクラスの状態を客観的にみるための視点を付与していることを見てきたが、このことは10年生による学級委員会の様子を観察しても明らかであった。まず3つの視点から一人一人が提案するが、司会がそれを読み上げることによって、クラス皆が一人の示した評価に耳を傾けその妥当性を吟味していた。その中で特に注目したいのがクラス全体の様子について、モビングがないか、うるさく騒がしくなっていないか、みんな授業が理解できているのかなどの観点から客観的な評価を下そうと話し合っていたことである。クラス皆の事柄を皆で考えることによって真の公共性という概念が体得されていくのだろう。

#### まとめ

今回の視察では、両校訪問の翌日にサイバーモビング予防プログラムを生徒の立場で体験するという模擬授業（ワークショップ）に参加することができた。その際、前述のアンチモビングコファァを訪問者全員に1セットずついただいた。この中には「いじめのない学校」という冊子があり、学校の指導者は、この冊子を中心に学習してセットの教材やワークシートなどを利用すれば5年生や7年生の最初で催す「アンチモビング週間」を計画、実施出来るようになっている。今回の視察で通訳をお願いしたドイツ在住の堤晴代氏に依頼してこのセットの翻訳を進めていただいている。翻訳原稿を手元に置きながら視察校訪問の成果を今回ここにまとめた。



まずドイツのモビングと日本のいじめとを比べてみると、クラスなどの集団を構成する子ども達の人種・民族・宗教などの多様性の度合いという点からは大きな隔たりがあるものの、授業で取り上げられたいじめの種類などを見る限りそれほど違いはないと考えられる。滝が指摘したような欧米の研究者の捉えた bullying や mobbing と日本の研究者のいういじめとのニュアンスの違いは<sup>11)</sup>、それほど感じられなかった。ただ今回視察した授業では、まず普通の喧嘩があり、その延長線上にモビングが起きるというメカニズムが強調されていた。日本で指摘されているいじめの中には、さしたる喧嘩やトラブルなしに、ある日急にいじめのターゲットが入れ替わるという形のいじめがある。これについてドイツの学校での認識とのずれがあるかどうか確認する必要がある。

今回の視察校でのモビング予防のためのキーワードは「社会生活の習得」であった。その授業で子ども達が学んでいたことをいくつか具体的に挙げるならば

- 集団内では個人のわがままな言動で他者に迷惑をかけることは許されない。(私語や立ち歩きなど)
- 集団内では集団の質の向上に気を配る。目標としてのよりよい集団のイメージを共有しなければならない。
- 争いの決着は当事人同士で解決できない場合、力の強い方が勝つのではなくて、仲裁役の者を交えて話し合いの上で解決すること。
- いじめその他人に危害を加える行為はやめなければ、犯罪として処罰されること。
- 力のある者は弱い立場の者をお世話し、助けるべきであり、決していじめてはいけない。
- 誰でも困ったら年上の者や他者に助けを求める権利を持っている。黙っていてはいけない。
- 皆のために役立つ行為は称賛され奨励されるべきである。

これらの事柄は、公共性をわきまえた個人としての自立という意味で「市民性」の獲得につながるものと考えられる。日本の中で考えてみれば、公の場面においても個人の好み・趣味・嗜好を優先させるいわゆる私事化という風潮に歯止めがかからない現状がある。「クラスのため」「皆のため」「人の役に立つ」という価値を「しらじらしい」「あほくさい」「ぶりっこ」として貶めることに躊躇しない生徒のムードは「市民性」の対極にある。しかしそのムードに敢えて抗い、声をあげていかない限り、生徒同士が交流しながら成長するポジティブなムードの集団をつくることはできないと腹をくくべき時なのかもしれない。

#### 今後の方向

アンチモビングコファーマー全体の翻訳を進め、そこに示されているアンチモビング週間の計画を日本の学校用に焼き直し、協力校を募り、いじめ予防プログラムとしての有効性を検証していきたい。さらにその有効性が確認された後に、日本の教育課程にどのように位置づけ日常の教育活動に取り込んで溶け込ませることができるか、その可能性についても検討していきたい。

## 註

- 1) Techniker Krankenkasse 翻訳：堤晴代 監訳：筆者（2008）“Mobbingfreie Schule Gemeinsam Klasse sein!” p7 には、「ドイツ語圏内では Mobbing という言葉が特に使われる。これは英語の mob（賤民、暴徒）に由来するものでアングロサクソン語圏では Bullying も使われている。元々の意味は脅す、意地悪する、虐げる等を指す。」とある。
- 2) Oberschule というのは、旧東ドイツ時代の小中一貫の義務教育学校を指したが、リヒテンベルクでは統一後もこの名称が残っており、訪問した Fritz-Reuter-Oberschule は、同じ校地に Grundschule があったが、Oberschule は、またの名を Sekundar Schule とも言い、初等教育部門を含まない 7 年生以上が通う中等教育学校を指しているようだ。Hauptschule（基幹学校）や Realschule（実科学校）という区分はなく、「ギムナジウムではない、基礎学校の上にある学校」というイメージで捉えられる。
- 3) ドイツでは通常 Grundschule（基礎学校）は 4 年生であるが、旧東ドイツの地域では 6 年生の基礎学校が存在する。
- 4) Rainer Bächt, Dr. Wolfgang Steininger (2012) “Soziales Lernen mit dem buddy-Programm in der Berliner Schule” DIE GELBE REIHE-Regionale Fortbildung Lichtenberg
- 5) 発案者である Rainer Bächt と Dr. Wolfgang Steininger の二人がこれに当たっている。
- 6) バディのお世話活動の内容は柔軟で、ねらいにそうものであれば子どもや教師の発案でいろいろな名称のバディがつけられる。例えば交通バディなどは、日本で言えば登校支援ボランティアの活動であるが、子どもの自主的な申し出で毎日活動が続けられている様子であった。また、一度できたバディでも、必要がなくなったり、うまく機能しなかったりすると廃止するということもあるようである。
- 7) Soziales Lernen の訳であるが、この語は、注 3 のバディプログラムの報告書の表題の先頭にある。つまりこのプロジェクトの中心テーマと言える。
- 8) 森田洋司（2010）「いじめとは何か」中公新書 p.71
- 9) Techniker Krankenkasse 翻訳：堤晴代 監訳：筆者（2008）“Mobbingfreie Schule Gemeinsam Klasse sein!” p.10, 11
- 10) Techniker Krankenkasse 翻訳：堤晴代 監訳：筆者（2008）“Mobbingfreie Schule Gemeinsam Klasse sein!” p.12
- 11) 滝充 監修 森田洋司（2001）「いじめの国際比較研究 終章 国際比較調査研究の意義と今後の課題」金子書房 p.196-199